



デア ハーフエン Der Hafen

Nr. 72
2024年10月-12月

ドイツ中小企業との対話

横浜日独協会会長 成川 哲夫

今年の8月、ドイツの中小中堅企業の次世代オーナーおよびファミリービジネス研究者(ツェッペリン大学教授)の視察団が来日した。彼らは、ドイツ企業の将来のリーダーとしての経営視点を広げるために、日本の経済、社会、産業構造、中小中堅企業を取り巻く情報を得る目的で、日本滞在中、個別企業の訪問視察とともに、経済同友会に対してもブリーフィングの要請があり、私と数名で面談した。

日本とドイツの中小中堅企業(SME)は、両国経済において重要な役割を果たしている。企業数の割合では、両国ともに99%を超え、経済全体にとって欠かせない存在となっており、特に雇用創出、技術革新、地域経済の発展において重要な貢献をしている。しかし、そのビジネスモデル、経営手法、国際展開においては日独で大きな違いが見られ、これらを踏まえて、今後の両国での連携がどのように進められ得るかを考えることには意味がある。

◆ 日本とドイツの中小中堅企業の構造的相違点

ドイツの中小中堅企業は「ミッテルシュタンド」として国際的にも有名であり、その多くが家族経営であることが特徴である。ミッテルシュタンドの企業は、技術的な専門性を背景に、高い独立性を維持しながら長期的な視点で経営を行い、リスクを取って国際市場に進出することが一般的である。その中には「隠れたチャンピオン」と呼ばれ、世界市場でトップのシェアを持つ中小企業も多い。これに対し、日本の中小中堅企業は、技術力においては同様に優れた面があるものの、多くの場合、大企業の下請けや系列企業としての役割を担い、経営の独立性に欠ける側面がある。

日本の中小企業の国際展開に関しても、ドイツとの違いは大きい。ドイツの中小企業は自ら積極的に国際市場に参入し、グローバルな競争力を高めてきたが、日本の中小企業は多くの場合、親会社や大手商社の展開に従う形で海外市場に進出するケースが一般的で、系列の中での位置づけや、商社経由での展開に頼ることが多い。これはドイツ企業との大きな差を生む要因となっている。

◆ 中小中堅企業における共通の強みと価値観

こうした構造的な違いの一方で、日独の中小中堅企業には共通する強みや価値観も多く存在する。技術力の面で見ると、日独両国の企業は共に非常に高い専門性を有し、その技術革新の成果は両国経済にとって欠かせない。特に製造業や工業製品分野において、世界的にも高い評価を得ている企業が多く存在し、これが日独両国の中小企業の国際的な競争力の源泉となっている。また、両国の中小企業はその多くが長期的な視点に立った経営を重視している。特に家族経営企業が多いドイツのミッテルシュタンドでは、次世代への事業承継を前提とした長期的なビジョンが重要視されている。

これらの価値観は、技術力の強化や安定した経営基盤の確立に寄与しており、共通の強みとして日独の中小企業を支えている。さらに、両国の中小企業は変化への対応力が高く、イノベーションを柔軟に取り入れる姿勢を持っている。ドイツの企業は、グローバルな競争環境の中で培われた適応力により、技術革新やデジタル化、環境への配慮といった分野でリーダ



シップを發揮しているが、日本の中小企業もまた、技術革新や環境対応において高い意欲を持っており、特に国内市場での競争力を維持するために、こうしたイノベーションの重要性を認識している。

◆ 日本企業が学ぶべきポイント

日本の中小中堅企業が今後、国際市場においてさらに競争力を高めるためには、ドイツのミッテルシュタンドから学ぶべき点がある。

- ① 第一に経営の独立性の強化が挙げられる。日本の中小企業は大企業の下請けや系列に依存しがちであり、独自の経営戦略を持ち、柔軟な意思決定を行うための仕組みを導入することが重要と言える。
- ② 積極的な国際展開を行う姿勢も必要である。日本の中小企業は、国内市場に依存するビジネスモデルが多いため、国際展開が遅れることが多い。今後の経済成長や競争力の確保のためには、早期から国際市場をターゲットにした戦略を立てることが重要であり、自社の意思で積極的に海外市場に進出することが求められる。
- ③ 技術力の強化も不可欠である。日本とドイツの中小企業が共に持つ技術的な専門性をさらに高め、国際的な競争優位性を確立することが、今後の持続可能な成長に繋がる。特に環境技術やデジタル化の分野では、技術革新が企業の競争力を大きく左右するため、取り組みを強化することが求められる。

◆ 地政学的リスクと経済安全保障

現在、日独両国は、ロシアによるウクライナ侵攻やエネルギー供給の不安定化など、地政学的リスクの高まりに直面している。こうした状況下、経済安全保障の観点からも、日独の中小中堅企業の連携が求められている。特に、サプライチェーンの強靱化は喫緊の課題であり、日独の中小企業が協力して、持続可能で安定した供給網を確保することは重要である。今後も多くの不確実性が予想される中で、日独両国の中小企業はそれぞれの強みを活かして、共にリスクに対応する体制を築くことが必要であり、特に日本の企業はドイツの経験から学び、地政学的リスクへの対応力強化の方策を模索するべきである。

日本とドイツの中小中堅企業は、構造的な違いはあるものの、共通する強みや価値観を有している。日本企業がドイツのミッテルシュタンドモデルから学ぶべき点は多い。

法人会員紹介

日本バウシュ株式会社

- **Bausch + Ströbel** 社は、バーデン・ヴュルテンベルク州イルスホーヘン（Ilshofen）に本社を置き、製薬業界において、液体・粉体用の無菌充填装置や自動包装システムに特化した技術とサービスを提供する世界的なリーディングカンパニーです。

1967年に製薬企業向け専門機械メーカーとして4人のエンジニアにより設立されました。

現在では世界各国に約2,850人の従業員が従事し、日本をはじめ世界50ヶ国に販売代理店を持ち、年間約400台（単体機換算）の生産能力を有する企業に成長しています。

Bausch + Ströbelの技術とサービスは、生命を救う重要な医薬品やワクチンの供給、病気の治療、疫病の予防、バイオテクノロジーと医学の進歩に大きく貢献しています。



Bausch + Ströbel 本社

■ 日本でのビジネス

1977年4月、バウシュ・ウント・ストレーベル社の日本総代理店として日本バウシュ株式会社が設立されました。本社は横浜市都筑区仲町台にあり、大阪府豊中市に大阪支店があります。

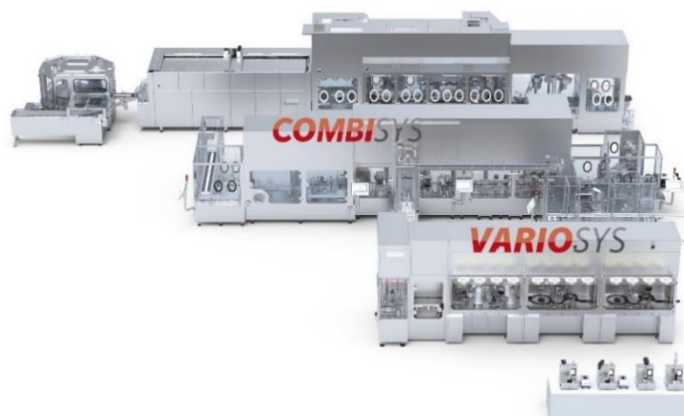
■ 世界基準のクオリティを提供

バウシュ社で製作される機械はEUガイドラインやさまざまな規格に基づきデザインされ、最新のGMP・FDAの指針を基に製作されます。

■ 製品情報

ラボスケールの装置から、全自動の無菌充填設備。

ガラスバイアル・シリンジ・カートリッジ・RTUバイアル・RTUシリンジ・RTUカートリッジ等の資材への無菌充填設備。



- 日本バウシュ株式会社の代表取締役社長は清家英男です。

「当社は設立以来400台以上の生産機械を輸入し、大手製薬メーカー、動物用ワクチンメーカーを中心に数多くの納入実績を持っており、クライアント様より厚い信頼を寄せていただいています。今後ともお客様ニーズに応えられるよう、技術開発・人材開発に努め、社会に貢献する企業を目指します。」

『楽しく、内容豊かな関西・四国旅行でした』

2024年7月記

横浜日独協会名誉会長 早瀬 勇

わずか2日間で、これほど歴史的・文化的に多岐にわたり、他の日独協会との心温まる交流を経験した内容の濃い旅行は、89年の人生で例を見ません。横浜日独協会の文化委員会（委員長：寺澤行忠・慶大名誉教授）が企画し、周到な検討と交渉を重ねてくださったお陰で、会員18名が参加してこの関西・四国旅行が実現しました。関係幹事の皆さんのご尽力に厚くお礼を申し上げます。

(1) 7/2 京都・長樂館でのシャンパンでスタート：

明治の“煙草王”村井吉兵衛が贅（ぜい）を尽くした迎賓館で完璧な英国式アフタヌーンティー。京都市有形文化財。関西出身の向井副会長が幹旋。



(2) 祇園でのお茶屋体験：



八坂神社に近い祇園「辻糸」で舞妓の踊りと芸者の三味線を心ゆくまで鑑賞。伝統芸能の粋。寺澤行忠先生のご案内。

(3) 神戸日独協会と神戸・元町で懇親夕食会：

神戸は我々の先輩格のNPO法人。長年協会を献身的に支えてこられた榎田会長ご夫妻に温かく迎えられる。大阪日独協会の和田事務局長を含む30数名の出席者全員が和気あいあいとスピーチ。神戸の榎田会長以下約10名は翌日の四国見学にも同行。

(4) ホテル・オークラ神戸で一泊：



夜景が美しい。朝食会場では外人客が目立つ。

(5) 7/3 貸切りバスで鳴門へ。



鳴門ドイツ館と坂東俘虜収容所跡を見学：約百年前、青島(チンタオ)で日本軍の俘虜となったドイツ人将兵約5千人のうち約千人が、

鳴門の坂東収容所に約3年間収容された。俘虜全員が職業軍人のみではなく、家具職人や料理人や芸術家も多数含まれていた。

旧会津藩出身で敗者をいたわる松江豊壽収容所長は、俘虜の尊厳と権利を守り、自由で文化的な集団生活を彼らに認めた。二つもあったオーケストラによる演奏会やゲネプロ（公開リハーサル）は、2年10か月の間に124回あり、最も有名なのは1918年6月1日にアジアで初めて演奏されたベートーヴェンの第九「合唱付き」。年末になると日本中に響き渡るあの”第九”。その“歓喜の歌”は欧州連合（EU）の歌にも採用されている。演劇や講演のチラシ（カラーのリトグラフ印刷）を見ると、ドイツ人の文化に対する憧憬と不屈のクラフトマンシップが感じられる。

(6) ドイツ兵慰霊碑前で神戸・横浜両日独協会員による「第九」の合唱：

アジア初演の場所で、「歓喜の歌」を歌った喜び！炎天下で榎田会長夫人が、シラーの歌詞をバスの出口で参加者に手渡すお姿が印象的。地元の案内人の「さすがにドイツ語の発音が奇麗ですね」というコメントに気をよくしてバスは徳島の阿波踊り会館へ。



(7) 阿波踊り会館で踊りの鑑賞と実体験：



最後の飛び入りコンテストで、参加者最高齢95歳の磯貝会員が二位入賞。バスは一路徳島空港へ。

このような二度と経験できない濃密な関西・四国旅行は無事成功裏に終わりました。これから毎年年末になると必ず慰霊碑前での神戸・横浜両日独協会員による「歓喜の歌」合唱を思い出すでしょう。日本ほど多くの方が「第九」を歌う国は知りません。願わくば、全国で「合唱」に参加する方々一人一人が、横浜日独協会が実行しているホームステイ受入れなどの身近な国際交流を実践して、「すべての人々は兄弟になる」（Alle Menschen werden Brüder, …）を体現していただきたいと念じます。

この文化委員会の行事に全力で当たられた寺澤委員長、一生懸命アシストされた中尾副委員長、大手旅行会社での経験をフルに生かして計画を実行し、周到にガイドしていただいた千原会員に感謝申し上げます。さらに向井・南雲両副会長の細心の手配や運営にも厚く御礼申し上げます。協力的な参加者の皆さん、ありがとうございました。（以上）

駐日ドイツ大使の送別パーティー報告

横浜日独協会名誉会長 早瀬 勇



駐日ドイツ大使クレームス・フォン・ゲッツェ博士は、この度日本勤務を終えられることとなり、去る7月10日東京・南麻布の大使公邸で送別パーティーが催されました。(写真：フォン・ゲッツェ大使と早瀬名誉会長夫妻一大使公邸にて)

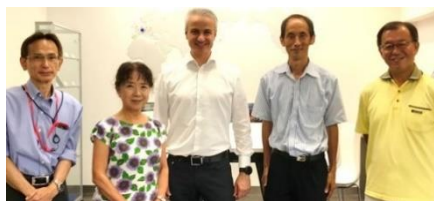
大使は、本省政務局長、駐イスラエル大使、駐中国大使を経て2021年9月東京にご着任以来、3年間にわたってロシアのウクライナ侵攻やアジア太平洋地域の安全保障問題など外交問題が山積する時期に、日独連携による世界平和維持のため外務・防衛の“2+2”はじめ閣僚協議の定期化など精力的に活躍されました。当協会でも本年1月に日独の連携について講演されました。

送別会のスピーチでは、世界秩序維持のため日独の一層の協力が求められていることを強調され、日本滞在中は美しい自然の中で楽しく生活できたことに感謝している旨ご挨拶がありました。

ご在任中のご指導ご協力に感謝しますとともに、次の任地メキシコでもご夫妻そろってご健康で実り多い生活を送られますようお祈りいたします。(8.18記)

トルンプ社夏休み見学会

副会長 南雲 淑子



マイケル・ザムトレベン新社長(中央) 暑い夏の一、8月22日に白山ハイテクパークにあるトルンプ社で行われた夏休み見学会に参加致しました。トルンプ社は横浜日独協会の法人会員として私達をサポートして下さっている精密機械の企業です。この企画は中山地区センターとの連携で地域の小学生を20名募集し、トルンプ社で機械を使って簡単な工作を体験しようというものです。

トルンプ社ではこの企画の為に社員の方々が仕事と同様に情熱をもって取り組んで下さり、今回は紙飛行機を飛ばすピストルのようなカタパルトを作りました。カタパルトとは航空母艦から飛行機を飛ばす装置だそうです。まず金属板を90度に曲るという作業で、機械にあらかじめ用意された金属パネルを挟み90度に曲げました。この機械では何度の角度にでも曲げられるそうです。次にやはりあらかじめ用意された金属パネルとその曲げ



た部品を溶接しました。この2工程ですが、溶接の機械の大きさ、ロボットのアームで自在に溶接出来るという緻密さに驚かされました。そして組み立てて仕上がったカタパルトを使って自分で折った紙飛行機を飛ばし、1番遠くに飛ばした子が表彰されました。



子供に機械を使わせるにあたり、トルンプ社の方々が本社にも相談し、どれだけ気を遣い準備をなされたかは想像に難くはありません。心より感謝申し上げます。またこの企画を立てお手伝いくださった中山地区センターの方々にも感謝申し上げます。

今回の参加者は、岡本理事、津澤事務局長、大瀬顧問(当日は欠席)、南雲でした。そしてサプライズで、ドイツより赴任なさったばかりのSamtleben新社長にもお会いできるというチャンスを頂きまして、今後の日独協会にとりましても素晴らしい1日となりました。

神奈川大学ドイツ語授業に参加して

2024年6月27日

会員 地野 洋子



向井、南雲両副会長、理事の方々含め会員8名で、横浜桜木町、みなとみらい地区に2021年4月に開設された神奈川大学みなとみらいキャンパスを訪問、Buchenberger先生のドイツ語授業に参加させて頂きました。このキャンパスには経営学部、外国語学部、国際日本学部の3学部があり、『学生のためのキャンパスであると共に、あらゆる「人」が集まり、「知」が交流する、Global, Diversityを象徴する拠点となることを目指す「知の拠点』』ということで、まさに「様々な設備、施設を持った都市型、未来型キャンパス」でした。

授業見学の前にオーストラリア出身で日本語堪能なSimon John先生から、21階建て、地上99.9mのキャンパスビル内、Social Commonsと呼ばれる1階のGlobal Loungeを案内して頂きました。“For All”のコンセプトを持つこのスペースにはFabLobと呼ばれるデジタル機器を備えた実験工房もあり、神大生だけでなく横浜市民にも、また大学を志す高校生のためにも開かれていて、毎日大学見学もできるということでした。

その後7階の教室に移動、国際日本学部1年生、ドイツからの留学生1名を含む約20名のドイツ語授業に参加しました。教室の後ろで授業を見せて頂くというのではなく、学生から協会会員に対してどの位で話せるようになるのか? 現地での生活で一番大切だと思ったことは? 文化の違いは? といったドイツやドイツ語習得に関する質問に対して、各参加者がそれぞれの日本、ドイツでの習得過程、方法、ドイツでの生活体験等を直接に学生に伝えるというものでした。その後3グループに分かれ、それぞれ学生と参加者で更に話を進めました。

4月に入学したばかりの学生にとっては、大学での学び方過ごし方にも敷衍した実際の経験を直接に聞くことができる機会になったのであればと、また参加者には現役学生と話をする貴重な機会となりました。

良い機会を頂きましたこと、感謝申し上げます。

フェリス女学院大学

夏季語学実習事前研修を訪問して

会員 川辺 祐香

東京住まいの私には緑園都市という駅名は馴染みがありませんでしたが、横浜より湘南台方面へ遠足気分街並みを眺めながら電車で揺られて到着。マンション群が見える割には酷暑の昼間のためか数えるほどしか人に出会わない中、5分ほどでフェリス女学院大学の正門を発見。9月に当横浜日独協会の講演会をしてくださる、同大学の高雄綾子先生からのご依頼でフェリス女学院大学の学生さんのドイツ語夏季研修先であるデュッセルドルフに関する情報を、とのことでデュッセルドルフ生まれであり、コロナの移動困難な時期を除いて毎年かの地を訪れている私に白羽の矢が立ったようです。



初めてのドイツ、および海外渡航の大学2年生と3年生の語学研修参加者は音楽学部や国際交流学部在籍で多くの方は Intensive コースとのことでした。私が何十年も前に在籍していたデュッセルドルフ大学の学寮に一月滞在して、市電に乗り毎日市内の IIK デュッセルドルフという語学学校で研修とのこと。さて、何をご紹介したものか？と考えを纏めて、資料を事前に送ったものの、単なる観光案内はネットで調べることもできる。私よりも前に大学より数回の事前研修は終わっている。不安交じりではありましたが、学生さんの方が初めてのことに不安を抱えて緊張している様子を拝見し、これはもっと楽しく、新しい世界が待っていることをお伝えしなければ、という思いに駆られ、持参したパソコンを繋いでプロジェクターで私の撮りためた第二の故郷の写真を映し出しての説明を致しました。

大学のあるデュッセルドルフの南の方から、私の生まれた病院の近くのベンラート城、市内、旧市街、日本人街、私の好きな北の方の Kaiserswerth など写真と共に私の古い思い出話から最近の Immermann Str.事情と万が一体調不良になった時のために昨春にお世話になった日本語のできるドイツ人女医さんの情報。



大学のあるデュッセルドルフの南の方から、私の生まれた病院の近くのベンラート城、市内、旧市街、日本人街、私の好きな北の方の Kaiserswerth など写真と共に私の古い思い出話から最近の Immermann Str.事情と万が一体調不良になった時のために昨春にお世話になった日本語のできるドイツ人女医さんの情報。

硬水なのでリンスはドラッグストア(Rossmann)で買った方がよい、スーパーの種類と野菜などの量り売り、ペットボトルのリサイクル方法、出国前に携帯の SIM カードを AMAZON などで購入して出国前に LINE で開通しておくこと、など現地の話から、出国前準備まで幅広く、短い時間で走り抜けるようになってしまいました。学生の皆様は集中が途切れることなく、聴いてくださいました。

次に授業がある方以外はその後も残られ、「ドイツ人に人気のあるお菓子とかありますか?」「サングラスは必要ですか?」「SIM カード見せてください」「両替は日本と現地のどちらで?」とやはり身の回りのことを質問されました。何でも携帯やパソコンで調べ、購入するこの時代にあり、SIM カードは勿論のこと、現地の市電 Rhein Bahn のアプリをインストールすることをお勧めし、その場で皆、早速登録をされ、いよいよ実感が湧いてこられたようでした。

大学からは事前研修で、治安や薬物売人など緊張して気を付けるようにとのご指導が徹底されていたようで、かなり不安に思っていた学生も親日的な雰囲気や街並みを写真で見て、すこし楽しみになり不安ばかりではなくなったとのご感想を頂き、緊張の中でも少しでも楽しく思えるお手伝いできたなら、任務は遂行できたのではないかと思いました。学生さんには、留学を通して色々な国の人々と出会い、その後もそのご縁を大切にすることや、外国で自分が体験したことや感じたことを通して、逆に来日中の留学生はどのように日本で感じて、どのようにお手伝いができるかなどを考える機会にもなり、それが語学研修のみではない「留学」の醍醐味だと、教育実習ぶりに教壇に立ち、これをメの言葉として私のレクチャーを終えました。若者たちのこの一か月が無事に楽しく、将来の進路や生き方へのヒントとなりますように!

フリゲート艦上のレセプション

常務理事 大堀 聡

ドイツ海軍のフリゲート艦「バーデン=ヴェルテンベルク」と補給艦「フランクフルト・アム・マイン」の2隻が8月20日、東京港へ入り東京国際クルーズターミナルに接岸しました。日本の海上自衛隊やフランス、米国、イタリアの艦船が参加する多国間演習に参加するためです。

その間の8月23日、フリゲート艦上でレセプションが開かれました。横浜日独協会も招待され、成川会長と根岸外国人墓地での墓前祭を担当している佐藤理事と私が参加しました。



会場には新たに着任したペトラ・ジグムント大使も姿を見せ、周りには人垣が絶えませんでした。

「ウィーンを巡る物語」

～ウィーンの文化、音楽、方言など～

講師 河野 純一先生 横浜市立大学名誉教授
元ウィーン大学客員教授

6月15日(土) 理事 北井 康一



北井氏(左)と河野先生

始めに

私は、以前、ウィーンに半年ほど在住してしまし、その後、帰国後は、本業の傍ら、細々と音楽活動を継続していたところ、職場のすぐ隣のそごうに、読売文化センターと言う、カルチャーセンターがあり、「ウィーンの音楽と文化」と言うテーマで講座が有りまして、もう5年以上、受講しています。

そして、最初は知らなかったのですが、講師の河野先生はなんと、母校の大先輩にあたる、と言いう事で、びっくりもしました。

そうこうするうちに、横浜日独協会の講演会で、この度、講演をお願いしようと言う事になりました。

その後、講演の日時やテーマなど打ち合わせして、上記、日程での開催となりました。

当日の講演ではパワーポイントを用いての解説と、音楽面はCDでの演奏、と言う事で準備に入りました。

自宅のCDラジカセを試運転したら、カタカタと走行音がするので、心機一転、新型のCDラジカセを調達し、試運転をして当日に備えました。

ところが、事前にはうまく作動しましたが、当日は、機械の調子がまいちで、なかなか希望の音楽が出にくかったので、講師の先生や、参列の皆様にご迷惑をおかけして、大変申し訳なく思っています。

さて、講演内容については、ウィーン大学での講義の為、客員教授として、1987年から89年まで、2年間ウィーンに在住して、現在のウィーン大学東アジア研究所の日本語部門に所属し、日本事情、ドイツ語の日本語翻訳授業などを担当されていたそうです。

現地ウィーンで発行されている「月刊ウィーン」誌に「ウィーン、知らなくてもいい話し」というタイトルで、35年にわたり連載を執筆中です。この雑誌は、最初、紙の媒体で出版されていましたが、現在では、紙の媒体の他、日本からもウェブで読む事ができます。私も5年以上、継続して拝読しています。

また、ドイツ語に関しましては、ドイツ本国でも、低地のドイツ語や高地のドイツ語で結構、違いがありますが、オーストリアのドイツ語は、ドイツの高地のドイツ語に近いようですが、ドイツ人がウィーンのドイツ語を聞いた時にはあまり、よく聞き取れない事もあるそうです。

ウィーンは、ハプスブルクの歴史に深く関わっていて、ヨーロッパの広大な領地を擁していたので、多民族国家であり、例えば、1910年のハプスブルク帝国時代の人口構成では、ドイツ系が23%、ハンガリー系が19%、トルコ系が13%などなど、様々な民族で構成されていたとの事。例えば、有名な指揮者の、カール・ベームの「ベーム」と言う単語はそもそも、「ボヘミア人」と言う意味合いとの事です。

あと、横浜市立大学とウィーン大学は、相互に交換留学制度があり、コロナ前から、毎回、数名ずつ、ウィーン大学に留学する制度があり、またウィーン大学からも横浜市立大学に留学の為に、来日されるとの事。

日本から、ウィーンに留学する学生に対して、2つの事を厳しく言い渡すとの事。一つは、「麻薬に手を出すな！」もう一つが「必ず、学業が終わったら帰って来ること！」だそうです。

ウィーンに留学して、ウィーンに住んでいると、とても居心地がいいので、そのまま定住する人が少なくないそうです。

私の知り合いでも、もち論、横浜市立大学出身の学生ではなく音楽大の卒業生ですが、ウィーンにそのまま在住し、音大の教師に就職している人や、通訳・ガイドの職を得てそのまま在住している人が、何人もいました。私も将来は、老後に、ウィーンに暫く、住んでみようという計画を立てています。

ところで、不肖、私も、40年くらい前に、ウィーン大学の「外国人の為のドイツ語講座」を週3回、半年間受講していました。国立のウィーン大学が低廉な学費でドイツ語講座を開催しております。

例えば、夏休みだけ3週間のコースなどもあるようです。ただし、ウィーン方言での学習となりますのでドイツ方面での留学などを模索している方は、あまり向いていない様な気がします。

などなど、お話は尽きなかったのですが、場合によっては、第2弾の開催も模索したいと思います。

なお、上記、横浜そごう読売文化センターの河野先生の講座は、毎月、第1日曜日、12:45から1時間半の間に現在も、開講中です。1回だけの、お試しコースもあります。

お問い合わせ先:

045-465-2010 読売文化センターまで

フランツ・ヴァルデンベルガー所長による 「働き方改革と地方創生」という講演記録と 提言についての感想



楠根 重和
金沢大学名誉教授・
石川日独協会名誉会長

現日本ドイツ研究所長フランツ・ヴァルデンベルガー教授は「働き方改革と地方創生」と題する講演において、かつて世界をリードしていた日本が、この30年間停滞し続けた理由を分析し、失われた30年を脱するための提言を行った。この講演は3章と結論から成り立っている。



ヴァルデンベルガー教授

最初の章「地域分布 - 地方分権」の視点はとても大切である。ドイツに住んでいると、日本は中央集権国家であることが分かる。地方分権とか省庁の地方移転など話題になるが、本気度が欠ける。近代国家を作るために日本は、地方から頭脳を東京に集めた。地方では少子化と人口減が進み、地方都市の消滅は避けられない。ドイツは州都だけではなく、地方都市にも賑わいがあり、とても魅力的である。歩いて行ける範囲にスーパーや小売店が存在する。日本では地方都市に行くと、ほとんどがシャッター街で、死の町となり、車がなければスーパーに買い物にも行けない。公共交通機関も衰退している。ドイツでは過疎や限界集落はまれで、Partikularismusという伝統の上に州や地方都市が存在し、一定のレベルを維持している。地方都市でも、コンサートホール、オーケストラ、劇場がある。日本のように地方の犠牲の上に首都圏が一人勝ちすることはない。ヴァルデンベルガー先生が指摘しているように、ドイツにおいては研究機関、企業の連携が活発だ。大企業の本社が首都圏に集中する日本とは異なる。この点について先生は、地方への権限を委譲し、地方に先端産学連携クラスターを作り、優秀な人材が地方に留まる仕掛けを作る必要性を指摘している。大企業による大卒の一括採用は地方都市に不利に働くということはもっと意識しても良い。

第二章は「人口動態 - 移民政策」である。日本では耕作放棄された田畑、荒れ放題の森林が至る所にある。本来農業や森林業はとても魅力のある分野であり、環境保全、観光の観点からも重要である。少子高齢化はほとんどの先進国の共通の課題であり、この点では日独も変わりはない。しかしドイツでは少子高齢化はそれほど問題にならない。現在のドイツ人の三分の一は移民を背景に持つ新しいドイツ人だという。日本は真剣に移民政策を行ってこなかった。教育レベルの高い外国人に日本が選ばれるためには、年功序列の給料体系ではなくて、成果システムの給料体系の導入、外国人の日本語教育、異文化理解能力を高める教育を支援する体制構築が必要だと先生は指摘する。

一番時間を割いて述べられたのは、第三章「生産性 - 多様なキャリア形成」である。日本は研究、教育、研究開発費の分野でも世界のトップクラスなのに、なぜ生産性が低いのかの理由として先生が指摘したのは、日本のキャリアシステムである。年功序列と非正規社員、女性労働者の低賃金、55歳で賃金のピークを迎え、その後同一の仕事をしていても低賃金で働かず。非正規労働者、パートタイマー、外国人研修生など、生産性を上げる代わりに、賃金を切り下げることによって企業は利益を出してきた。全く同感である。これでは能力のある外国人労働者にとって日本は魅力的な国と映る訳がない。また企業が年功序列で労働者を抱え込んでいては、外資系の企業は、優秀な人材を集めることが出来ず、結果として日本へ投資しないのである。先生の指摘を日本企業も日本の政治家も真剣に受け止め、国際競争に打ち勝ち、少子化の問題を解決出来なければ、日本の将来はない。

最終章では、上記の三つの章は相互に結び着いていることを指摘した。

〔註：ヴァルデンベルガーDIJ所長の講演は、本協会などの後援を得て、本年4月9日アジア・ユーラシア総合研究所の日独研究フォーラムで行われ、その講演記録とフォーラムとしての「日本への提言」は上記総研から出版された。〕

横浜市役所訪問 (文責 岡本 博之)



去る7月4日に、成川会長、南雲副会長、津澤常務理事、佐藤理事、岡本で横浜市役所を訪問し、4月に着任した三枝忠裕国際局長と面会しました。

冒頭、成川会長から、コロナ後の日独交流充実に向けて、高校生の作文コンクールなど、一層の支援をお願いし、三枝局長は、国際政策課長時代にフランクフルト市とのパートナー都市締結と横浜日独協会設立を担当した思い出や、山中市政の重要施策として次世代育成、子育て支援、環境保全グリーン政策、中小企業振興で連携できれば、と話されました。6月にオデッサとの姉妹都市関係から、ベルリンで開催されたウクライナ復興支援会議出張の様子や、der HAFEN掲載の成川会長のリニア新幹線記事を読んで、日独の対中国経済関係の違いなど、初対面と思えない深い意見交換が、終始和やかな雰囲気で行われました。

今後、高校生作文コンクール入賞者に対して、フランクフルトや上海の駐在経験者との懇談会など、協会の各事業レベルで連携が深まることが期待できます。

文化委員会企画

教養講座「日本文学逍遥」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- ・10月2日(水) オンライン講座
- ・11月6日(水) オンライン講座
- ・12月4日(水) オンライン講座
- ・2025年1月8日(水) **百人一首かるた会**
かながわ県民センター604室
(横浜駅西口徒歩5分、午後1時～3時)

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

クリスマス会のお知らせ

副会長 南雲

今年も楽しいクリスマス会が「霧笛楼」にて開催されます。恒例のクイズ大会のほかに、昨年同様に東京アルテリーベに出演なさっている歌手の栗田真帆さんをお迎えしてのクライネ ムジークショーを特別企画しています。

栗田さんの素晴らしい歌声とエンターテインメントを再びお聞きいただけますので、昨年お聞きになれなかった方も是非お楽しみに。

- ・日時：12月14日(土) 11:30受付
- ・場所：霧笛楼(横浜元町)
- ・会費：9,000円(飲み物代別)
- ・申込先：南雲 Tel 080-5034-9372
Mail: toshiko-n.721@ksj.biglobe.ne.jp
- ・会場の都合により、先着順40名様までとさせていただきます。

横浜日独協会 動画チャンネル！

エネルギー問題等タイムリーな話題のプレゼン動画を公開！フェイラーの山川和子さんや建築家森みわさんの関連動画も公開中です。
<https://www.youtube.com/@user-ij8rd7sv2l>
当協会ホームページにリンクがあります。



Youtube Channel

編集後記：

6月の末に会の企画で、みなとみらいにある神奈川大学のドイツ語のクラスを訪問しましたが、アシスタントのドイツ人の留学生が半世紀前に私が住んでいたPaderborn出身というのでとても懐かしくなりました。(山口)

イベント予定

■10月 イベント：

- ・日時：10月19日(土) 15:00～16:30
- ・会場：港北区民文化センターミズキーホール
音楽ルーム(綱島駅より徒歩3分)
- ・講師：ウーヴェ ハイلمان(Uwe Heilmann)氏
世界で輝いたドイツのテノール歌手
現在ハイلمان合唱団・オーケストラの
音楽総監督兼指揮者
- ・演題：「ドイツ人音楽家として日本人に伝えたい事
広めたい事」

日本に在住し、日本を愛するハイلمان氏。かつて世界中のファンを虜にした音楽、美声、そして豊富な演奏経験をもとにドイツの文化、芸術を語ります。

- ・参加費：1,000円 一般の方も参加できます。

■11月 イベント：

- ・日時：11月16日(土) 15:00～16:30
- ・会場：川崎市自治会館 大会議室1
(武蔵小杉駅より徒歩2分)
- ・講師：ゲオルグ ロエル(Georg Løer)氏
EURO-JAPAN Corporate Advisors Inc. 代表取締役
ドイツ NRW 州経済振興公社日本法人 NRW Japan
K.K. 前社長
- ・演題：「Deutschland im Herbst 2024 - Chancen für die
deutsch-japanischen Beziehungen」
「2024秋のドイツ-日独関係の新たな可能性」(仮)
40年余りに及ぶ日独経済交流活動を中心に、現在の
ドイツや日本について語っていただく予定です。
- ・参加費：1,000円 一般の方も参加できます。

<新入会員>

- ・中山 藍 様 (6月入会)
- ・吉本 慎也 様 (7月入会)
- ・田中 麻子 様 (8月入会)



Instagram

認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2024.10.1 (第72号)

所在地：〒247-0007

横浜市栄区小菅ケ谷 1-2-1 地球市民かながわプラザ

NPOなどのための事務室内 事務局：津澤

Tel: 080-7807-7236

会報編集責任者：山口 利由子

E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com

横浜日独協会ホームページ <https://jdgy.sub.jp>



法人会員

株式会社文芸社	ウインクル株式会社	ボッシュ株式会社	トルンプ株式会社	公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見	モトスミ・プレーメン通り商店街振興組合		横浜国立大学	成長戦略研究センター
株式会社コトブキ	神奈川大学	ケルヒャー・ジャパン株式会社	一般社団法人如水会	横浜支部 日独産業協会(DJW)
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株)		富士・フォイトハイドロ株式会社		日本バウシュ株式会社